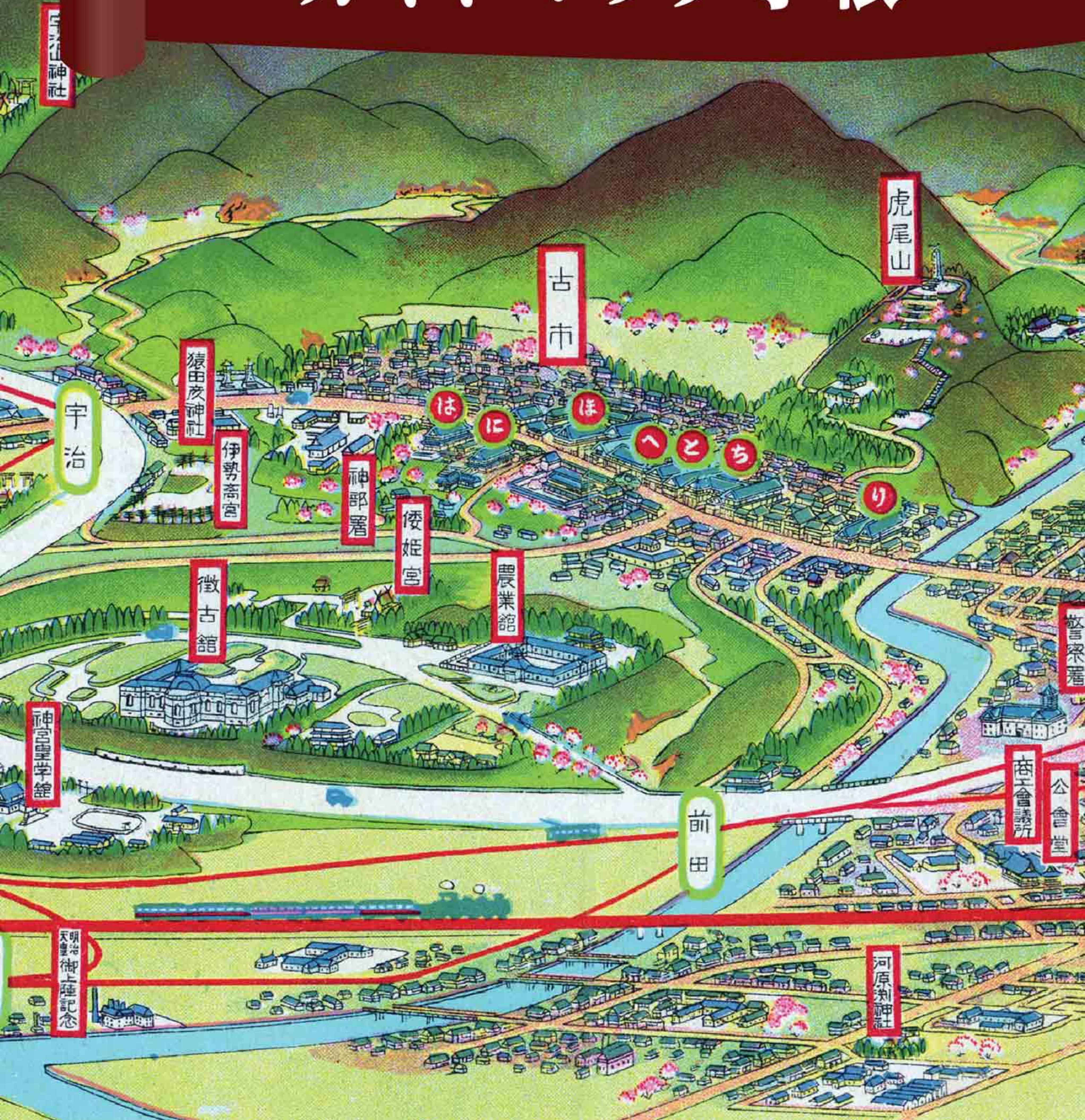


古市参宮街道と周辺地域 ガイドマップ手帳



発行にあたって

修道の皆様には、日頃より「修道まちづくり会」に対しましてご理解、ご協力を頂き誠にありがとうございます。

さて、「修道まちづくり会」にぎわい委員会の企画による『歴史散策』が平成26年度、27年度の2年間に亘り行われました。

私達が住むまちは弥生時代から形成され、江戸時代から明治にかけて古市参宮街道沿いに最も栄えたまちです。残念ながら古市参宮街道沿いのまちは、第2次世界大戦により殆どの建物が焼失てしまいました。しかし、昭和30年代から新しいまちがぞくぞくと開発されて誕生してきました。これから修道は古いまちと新しいまちが融合して発展しなくてはならないと考えます。

修道にお住いの皆様には、郷土の歴史を知って頂くのも大切だと考えて、『歴史散策』を企画しました。過去を知り、今より住み良いまちになることを皆様と一緒に考えていきたいと思います。

『歴史散策』で使用した冊子は皆様にも、是非、見て頂きたいと思い、平成26年度、27年度版を合冊にし、『古市参宮街道と周辺地域ガイドマップ手帳』として発行することとしました。何卒、皆様には一読して頂きたいと切に願います。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成28年1月
修道まちづくり会
会長 西山裕司
編集 柿本和男





■古市参宮街道北部編 地図	4
01 小田橋	4
02 妙見堂跡	5
03 寿巖院	5
04 お杉お玉	7
05 備前屋跡	8
06 古市芝居跡	9
07 大林寺	10
08 油屋跡	11
09 大五輪	12
10 修道小学校	12
■古市参宮街道南部編 地図	13
11 長峯神社	13
12 麻吉旅館	14
13 つづら石	15
14 寂照寺	15
15 桜木地蔵	16
16 牛谷坂	17
17 猿田彦神社	17
■周辺地域 地図	18
18 隠岡遺跡	18
19 常明寺跡	19
20 倭姫御陵墓伝説地	19
21 金刀比羅神社・神落萱神社	20
22 日蓮上人誓いの井戸	21
23 神宮徵古館・農業館	21
24 倭姫宮(内宮別宮)	22
25 神宮文庫	23
26 太田小三郎君紀功碑	24
27 龍池山松尾観音寺	25
■全体地図	27



1 おだのはし 小田橋



むかし勢田川を御贊川と称していたので、古くは御贊橋と称していた時代もあつたらしい。この橋の特徴は側橋が付いていたことで、生理中の女性などは皆この橋を通ったといわれています。寛永18年(1641)、3代将軍徳川家光の乳母、江戸幕府大奥に絶大な勢力をふるった春日局がこの橋の造替に際して、青銅の擬宝珠を寄進したという程の有名な橋でありました。

2 妙見堂跡

妙見町は今の尾上町の旧名です。妙見堂は妙見山北端にあるお堂で、むかし岡崎宮おかざきのみやといつて、度会氏の祖を祀った社であったといわれています。貞觀元年(859)11月15日、大内人高主の女性が御贊川おんべに溺れ死んだのを搜そうとして、却ってその川底から妙見星の木像を得たので、人はみな不思議なことに思い、岡崎宮に安置し、宮も瓦堂に改めて妙見堂と称したと伝えられています。



「祀るところの妙見星の尊像は童形にて面容童女の如く、頭上は禿髪かむろがみにて法服ようのものを着し、武装しているように見える。右の手に宝剣を持ち、左の手の二指を空に指し、残る三指を握りて、立像の長さ五尺ばかりなり、・・・・」とあります。この古い歴史を有する妙見像は、北辰妙見大菩薩と称される立像で、伊勢神宮の「ミコ」を祀ったものといわれており、約1,150年前の平安時代の作と称されています。現在は、東京読売ランドの一角に安置されています。

3 寿巖院

隠岡山いんこうざんとは、虎尾山の西北につづく小山で、正確には、尾上町字隠岡がそれです。寿巖院じゅがんいんは、その名をそのまま山号として隠岡山寿巖院いんこうざんじゅがんいんと号し、淨土宗鎮西派知恩院の嫡末寺であります。新築の本堂は屋根の瓦に寿巖院じゅがんいんの名が入っています。



同寺は、元和元年(1615)3月15日、縁蓮社欣誉寿巖上人の開祖で、

師資相承^{ししそうしょう}として出世（他山に転任）することを禁じ、その相承もいつに師の詮定によるを遺訓としたというから、いかに本山にとって重要な寺であり、格式を重んじたかがわかります。

本尊は黒阿弥陀で、全身に黒衣を纏った立像であります。県下には数少ない立像で、東京芝の増上寺の系統を引いているといわれています。

山門を入ってすぐ左側に立派な鐘楼^{しょうろう}が建っています。**梵鐘**^{ぼんしょう}は第2次世界大戦の時に供出させられました。**鐘楼**^{しょうろう}は明治22年の創建で、**梵鐘**^{ぼんしょう}は日清戦争戦死者追悼のために鋳造され直径2尺4寸、高さ3尺5寸、重量3百5貫ありました。現在の**梵鐘**^{ぼんしょう}は昭和51年5月に鋳造されたものであります。

それに並んで向かって右側に觀音堂があります。觀音堂の右に延命地蔵尊、その奥に古びた小祠が2つ建っていて、右からねむり地蔵、身代わり地蔵が安置されています。

ねむり地蔵は平蓮華台に立ち、背面は舟後光、右手に錫杖^{しゃくじょう}、左手に宝珠を載せています。眉高く目尻伸び耳朶ふくよかに、白毫のあたりに慈愛を漂わした面貌で、総体的に均整のとれた豊満な体躯をしています。

身代わり地蔵は完全な形像をなさず、目も鼻も口もなく、さながら布袋像に似ており、絶えず布で覆面をしています。諸病の平癒を祈願すれば、名の如く病人の身代わりとなり、不思議にも病める箇所と同じ場所に亀裂を生じ欠落すといわれ、歯痛に対して特に靈験顯著であると言い伝えられています。

このお寺には江戸中期の俳人三浦樗良^{みうらちよら}の句碑があります。**三浦樗良**^{みうらちよら}は名を元克、字を冬卿、樗良と号し、通称は勘兵衛と呼びました。享保13(1728)年、志州鳥羽藩三浦勘兵衛の子として生まれ、14歳の時、父が藩主の勘気を蒙ってやむなく山田に移住し岡本町に住んでいました。



地蔵菩薩

「わが庵は榎ばかりのおちば哉」

句碑建立 明治29年12月20日

※ 師資相承^{ししそうしょう}：子弟相受け継ぐこと

4 お杉お玉

お杉お玉がいつ頃から派生したかということは史実的に的確ではありません。もともとは比丘尼であったらしいです。「間の山節」の哀調詩を物悲しく唄って聞かせていました。その「間の山節」は、遠く天平13年(741)、僧行基が東大寺建立の是非を神意に^{ただ}紹^紹すため、伊勢神宮に参拝した際、世人に無常変転、一榮一枯の道理を示そうとして、涅槃^{ねはん}4句の偈文^{げもん}によって唱歌数首をつくり、これを比丘尼に唄わしたのが、そのはじめだと伝えられています。江戸時代に入ると間の山を上下する参道者の足は急に繁くなり、年と共に激化していきました。それと呼応してお杉お玉の服装も次第に高まってきた人気に支えられて派手になり、歌も「間の山節」のような悠長な哀調詩では行人の足について行けなくなりました。ついに路傍に小屋掛けをし、女は沙綾縮緬^{さらちらりめん}の大振袖で呉床^{くれどこ}に腰かけて三弦を弾き、男は編笠^{ささら}を被って笛羅^{*}を擗り子供を躍らせ、歌も何を言っているのか判らぬような早口でわめき散らすだけの乞食興行に変わっていました。客もただ、投銭に対する女の反応を楽しむだけの風趣の乏しい興味本位なものになってきました。だが、西鶴の『織留』の中に、「又、間の山の乞食、むかしは遊女のごとく小袖の色をつくして、味噌こし堤たるものおかし、其すがたには似^なりき中にもおたまおすぎとて、ふたりの美女あって、身の色を作り、三味線を弾きならし、あさましや女のすゑと伊勢ぶしをうたひける」とあってお杉お玉の名が出てくる最初のものだといわれています。寛文(1661～1672)、延宝(1673～1681)前後の頃までは、お杉お玉は三味線の連引きで「間の山節」を静かに唄っていたとみてよく、古市の花街が寛文、延宝の頃から急速な進展を示していることとも符合します。

* 笛羅^{ささら}：竹を細く割って束ねて一種の楽器として使用



5

びぜんやあと
備前屋跡

古市で最も早くから、そして衰えが顕著になりだした大正期まで、妓楼の代表格として名をはせたのが、牛車樓こと**備前屋**がありました。なぜ**備前屋**のことを牛車樓と呼んだのかといえば、同家が名古屋の西小路へ出店した時に、高貴な人が牛車で来遊したのを面白として、その記念にこの号を用いたということです。（高貴な人は尾張7代藩主宗春？）又、**備前屋**が伊勢音頭を始めた歴史は、古市妓楼中最も古く、遠く寛延年間（1750年頃）というから、今より凡そ260年以上も前のことになります。寛政6年（1794）、踊り舞台のせり上げ式*を考案したのも5代目であるし、更には明治の先覚者として、伊勢市へ数々の偉大な足跡を残した**太田小三郎**を輩出しています。**備前屋**は2つの別称があり、牛車樓と櫻花樓です。

備前屋はこの**太田小三郎**を以て、一応妓楼としての永い歴史を閉じることになります。昭和20年の戦災まであった**備前屋**は、太田氏廃業のあと、その名称を買い継いだのが岡本氏であります。

志賀直哉の代表作「暗夜行路」の主人公、時任健作が伊勢参りをした時に、伊勢音頭を観たのがやはり**備前屋**であります。又、高名な戯作者、式亭三馬に依頼して宣伝の配り本「伊勢名物通神風」文化3年（1818）を刊行するなど隆盛を誇り、天保8年（1837）妓楼案内所でも、年少の奉公人から仲居までを含めると88名の名がみえます。

現在は、バス停「テニスコート前」の近くに「**備前屋跡**」の記念石碑が建っています。

*せり上げ式舞台：左右から踊り子（娼妓）が出て、踊り子は中央ですれ違つて左右に消えるのが特徴であったといわれています。



⑥ 古市芝居跡（口の芝居・長盛座）

長盛座は口の芝居の跡に再建されたとされています（明治の初年にも長盛座の名があるとの説もあります）。明治22年には立派な長盛座が出来上がったことは事実であります。

発起人には油屋、備前屋、杉本屋、永田屋、松阪屋、松すし、古文字楼、岡室樓ら、8名の町有力者がまず名を連ね、つづいて桂木屋、千束屋が追加発起人となりました。そして、後には清玉樓、菊屋、鎌田屋、まさごやなども仲間に加わった節があります。

まず、財源として発起人1人につき、一口200円を拠出せしめたといわれています。長盛座には最後まで座主というものはありませんでした。又、それが後年のボス化を怖れた当初発起人の初志でもありました。

明治22年（1889）の開場のこけら落としには、関西演劇界の雄、初代中村鴈治郎を招いています。これがまた大変な人気で、連日、小屋もはちきれんばかりの盛況であったといわれています。

そのほか、片岡仁左衛門、市川左団次、実川延若、松本幸四郎ら、数々の東西名優がぞくぞくと来演しました。その板額が、玄関正面に麗々しく順序良く掲っていたが、すべて惜しくも昭和2年の大火で焼失し跡形もなくなりました。



伊勢音頭恋寝刃 (いせおんどこいのねたば)

明治30年頃の観覧料はどれほどの千両役者でも、30銭以上の料金は取らなかったといわれています。当時、最も普及したラムネなどは、どれほど仕入れても追いつかなかったらしいです。

役者が小屋に着くと、顔見世ということをやりました。これは何台も人力車を連ね、太鼓の先導で街中を練り歩くのであるが、河崎のような勢いの盛んな上得意の町では、わざわざ全員が車から降りて、いちいち頭を下げながら徒步で練ったものだといわれています。

長盛座の特色はなんといっても二枚札制度にあります。初日に木戸（入場料）を倍額払っておくと、以後その興行中は、何度も家族を何人連れて来ても一切錢を払わず木戸を通して入場出来たというものがありました。



大林寺は高照山大林寺と号し、浄土宗西山禅林派の古刹であります。寺伝によると、寛永2年（1625）の開基で、開祖は信空大和尚となっています。



本山は京都永觀堂であります。はじめ古市東裏（岳道）に創建されたが、のち西裏に移転し建設されました。嘉永5年（1852）6月27日の世にいう「**大林寺焼け**」は小僧が師匠に内緒で、本堂の縁の下へ入り、線香花火をたいていて遊んでいたのが原因だといわれていることからしても、かなりの**伽藍**であったことが想像できます。

大林寺がようやく再建されたのは、それから4年経った安政3年（1856）であります。慶応3年（1867）の過去帳によると、備前屋先代小三郎が再建には名実ともに中心になったものと思われます。明治元年（1868）の**廢仏毀釈**により、遂に明治5年（1872）になって意を決し、寺堂、寺宝、什器を悉皆身売りすることでこの窮場を逃れようとしました。

明治27年（1894）10月、取り壊されてから22年振りに本堂が再建されたのは本山から派遣された恵光の時代であります。

「**伊勢音頭恋寝刃**」のモデルである油屋おこんと孫福斎の墓「**おこん斎の比翼塚**」は昭和4年8月に建之されました。おこんの墓は坂東彦三郎、斎の墓は実川延若が追悼供養の為に建立しました。



おこん斎の比翼塚

8 油屋跡

寛政期に入ると、幕府の寛政の改革がかなりの苛酷性をもちその為に神領政治の上にも波及して、等しく恐慌を來したはずなのに、ひとり古市はその影響をさほどに蒙らずに伸びています。これは一つに、古市の特異性が上層部に大きく見直された結果にほかならず、古市の繁盛は、即神宮の発展に繋がるという相関性に立っての寛大な処置であったと考えられます。油屋は女郎 38 人、料理人 3 人、下女 2 人、下男 3 人、子飼い 12 人、それに主人夫婦、祖母の実に 61 人の大家族がありました。

油屋騒動の事件は、寛政 8 年 (1796) 5 月 4 日端午の夜宮の夜であります。斎がおこんと下座敷で、ちびりちびりやっている時に、芝居帰りの阿波の客 3 人が、賑やかに登樓し、やがて酒宴となり、おこんを斎から強引に間引きしていった仲居のおまんの行為が、この事件の動機であります。

犯人孫福斎まごふくいつきは当時 27 歳の宇治浦田町に住む青年医師であり、御師孫福久太夫貞知の養子として、医術修業のため 3 年間京都に遊学して帰り、浦田町に医家を開業したばかりの前途有望な青年であります。おこんは 16 歳となっているが、実際は 14,15 歳かも知れません。油屋はこの事件の為、女主人は殺されるし、多くの奉公人に死傷者は出るし、迷惑を蒙りました。一面、これが天下に知れると、伊勢古市油屋の名は全国津々浦々に至るまで鳴り響き、お伊勢さんへ参ったら是非油屋へ上ってきたい、門口を見るだけでも話題の物種になると、参宮客の一つの目標にまでなり、異常な繁盛をきたしたことも事実であります。油屋は明治に入って間もなく茶屋を廃業して、旅館に転業してまいましたが、歴代当主の商才がここにも良く活かされていて、他が不景気に悩む時でもひとり良く繁盛を続け、一時は皇族、貴賓の御宿も一手に賜わる程の盛況振りであります。



9

おおごり 大五輪

久世戸町の北側にある巨大な**五輪塔**は、昔より各種の名所絵図や文献に紹介され、一つの名所となっています。総高3m40cm。室町時代から慶長年間以前の古塔としては三重県最大といわれています。大体、**五輪塔**とは仏塔の一種であり、鎌倉時代以後、墓の一般形式とされたもので、五大を象徴する梵字を刻んであるのが普通とされています。五大とは、宇宙の万象を生成する元素すなわち地、水、火、風、空の五大を表したもので、地に当たるものが下段の方（正四角形の石）、水に当たるものが丸、火が三角、風が半円、空に当たるものが最上段の宝珠となっています。**大五輪塔**の由緒については諸説があり、いまだに定説がありません。



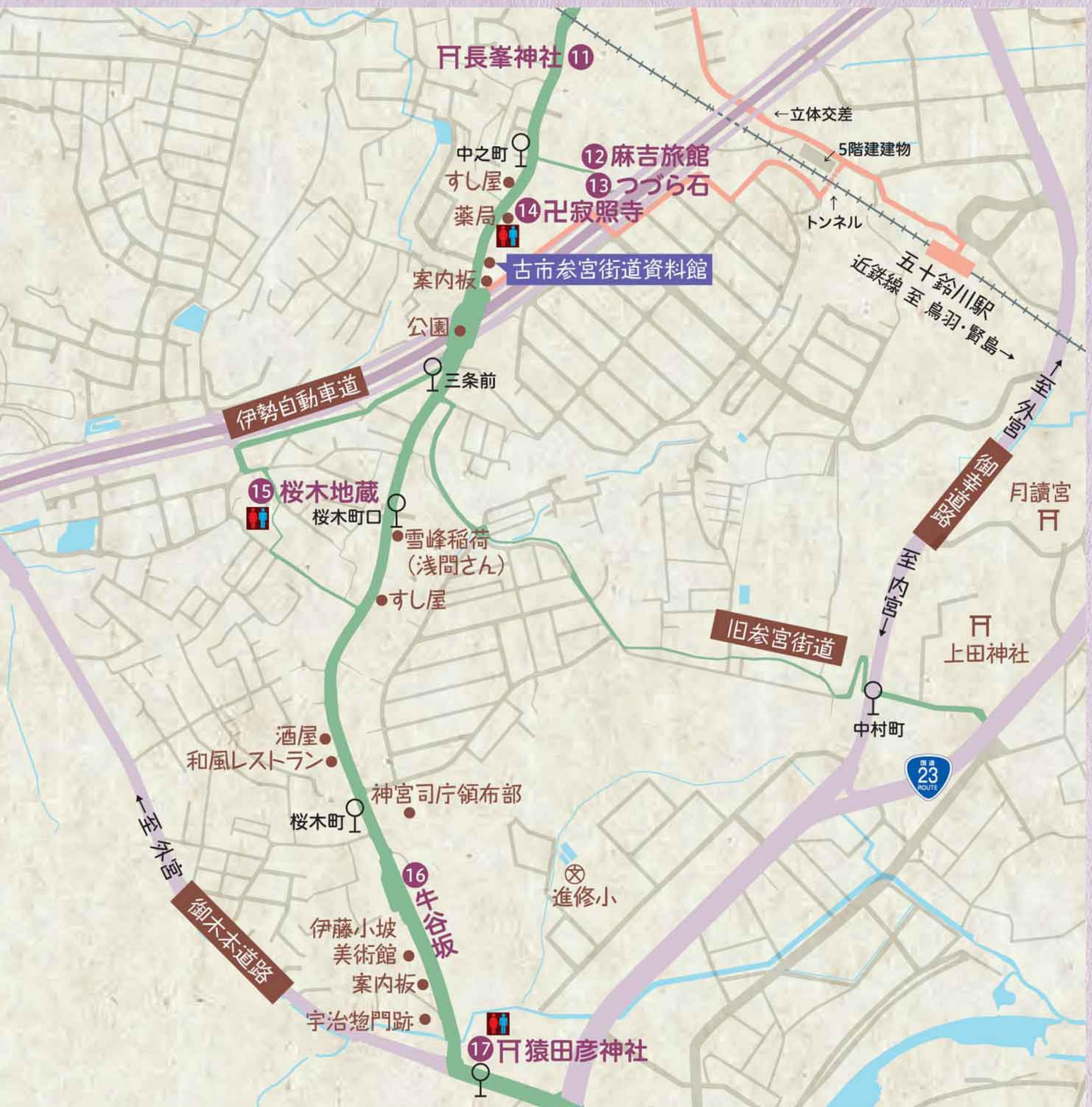
10

しゅうどうしょうがっこう 修道小学校

修道小学校は、明治7年（1874）1月大林寺（古市）の庭に**長峯小学校**と名付けられて、159名の児童を対象にしたものでしたが、児童はなかなか集まりませんでした。又、授業内容は寺子屋方式に毛が生えた程度のものでした。



長峯小学校は、その後、児童数の膨張により一時、**古市小学**（古市、久世戸）と**中之町小学**（中之町、桜木町）とに分かれましたが、明治16年（1883）9月、これに尾上小学から分かれた**倭町**を加え、児童数133名の**修道小学校**となつて現体制になりました。そして、明治40年（1907）5月に大林寺の庭から久世戸町に移り、現在に至っています。現体制の**修道小学校**となってからは132年目です。又、久世戸町に移転してからは108年目です。



11 長峯神社

うずめさん「天鈿女命」は、古市の南端東側に鎮座し、古市花街繁栄守りの神として、永く民衆に親しまれてきました。祭神はもちろん、猿女の祖と言われている天鈿女命であります。

『古事記伝』によると、天宇受売命は天岩戸の前で天香山の天之日影を



てすけ あまのまさかき かつら
手次に懸け、天之真榊を蔓として進まれ、全裸で踊って、大神の怒りを鎮め奉つたということになっております。花街にとっては誠にうってつけの氏神さまでありました。

芸能の神様ともいわれ、江戸時代から明治時代にかけ古市では歌舞伎が盛んに開催され、東西の歌舞伎役者がたくさんお参りに訪れていました。

明治4年(1871)11月郷社に列し、明治39年(1906)12月神饌幣帛指定社となり、長峯随一の資格社となりましたが、明治末の合祀によりその資格はすべて消滅しました。

昭和23年2月、漸く合祀が解かれて中之町の御陰社、桜木町の浅間社、久世戸町の菅原社と共に「うずめさん」の社地へ合祀され、長峯一帯の鎮守神としての性格上、長峯神社として発足することになりました。

12 麻吉旅館

麻吉旅館の歴史はなかなか古く、すでに天明(1781～1789)の地図にもその名をみることができるところから、230年近い年輪を刻んでいるとみたが、麻吉の看板には「嘉永4年創業」と書かれています。



明治時代には県下に珍しい5層6階木造の懸崖造りとして有名で、芸妓30人以上を常時抱え、伊勢音頭の舞台をもつ県下第一等の大料理店でありました。麻吉の音頭歌は「つづら石」といい、「奥の芝居」と共に大変な賑わいを見せた店が中之町の逼塞と共に次第に振るわなくなり、一時は新興「大安」に押され気味がありました。しかし、昭和30年前後より再び立ち上がる機運をつかみ、安価と閑静をキャチフレーズに、何もなくなった旧街道上に独り静かなブームを呼んでいます。昔から有名人が多数宿泊し、有名人の色紙や額が多数掲げられています。

※嘉永4年(1851)

13 つづら石

高さ8尺、横2丈余りの巨岩、つづら織を思わせる葛籠石は昭和40年代まで、藪の中にその勇姿を横たえており、その前に小祠を建てて、古来「お岩さま」として、地元民に崇められてきました。この社を御岩社といい、これに通ずる道路（麻吉の石段道）をお岩世古といいました。この辺り一帯は、寂照寺の寺領であったが、本堂修復費の一助として、宗安寺山の身売りに便乗して不動産会社に売却され、現在は五十鈴ヶ丘団地となり、「お岩さま」は自治会の神様として、崇められています。



14 寂照寺

天樹院（千姫）の菩提寺であり、延宝年間（1673～1680）、知恩院第37世寂照知鑑大和尚が天樹院の位牌並びに遺物を奉じて、その追善供養のために開基した寺で、知恩院にとっては重要な末寺でありました。その重要な末寺が廃寺寸前という荒廃した状態の時に、月僊が第8世の住職として晋山せしめることになりました。時に月僊34歳の春がありました。



寂照寺には開基以来、檀家というものはありません。月僊が安永3年（1774）、そういう重大な使命を帯びて入山すると、寺觀回復達成の目的を常に念頭におきつつ、ひたすら、余技を以て、資金蓄積を心掛けました。月僊は円山応挙について、写実主義を勉強し、更に、江戸の雪舟や元、明の書を慕い、池大雅と共に日本南画の大成者と目されている与謝蕪村の画風をも加えて、別に1機軸を出すに至った人になっていました。資金蓄積のやり方がいかにも金銭に貪欲であったために、世人は彼を乞食月僊などと卑しみましたが、彼は画料をせっせと蓄積しながらも、自分は全く粗衣粗食に甘んじ、少しも飾るところがありませんでした。



月僊上人之碑

公共事業や慈善事業のためには、かなり大胆に惜しげもなく金を費やしています。例えば、間の山の道路改修にも多額の費用を費やしています。

念願の伽藍再建に着手したのが寛政9年(1797)であり、大殿、庫裡、倉庫などの完成をみました。ついで経堂の新築は、寛政12年(1800)春から享和3年(1803)秋にかけて行われ、中に世義寺から購入した一切経2,000冊が収蔵されました。現在の経堂は平成24年に再建され、一切経が2,400冊収蔵されています。

月僊は修復中に有名な涅槃図を描いて、正を寂照寺に副を清雲院に残しましたが、明治14年(1881)5月12日の寂照寺炎上により焼失しました。現在、寂照寺にある涅槃図は**月僊**が清雲院に残してきた下絵です。伊勢市指定文化財になっている**月僊筆**の富士、月光観音、自画像ほか**月僊**の印章、絵皿などの宝物は無事であります。現存の寺堂は、明治23年(1890)、第12世源州の再建であります。又、境内にある「**月僊上人之碑**」は、弟子定僊の建立です。更に、経堂の南にある觀音堂は、俗称お岩觀音と称される木像が安置されています。3尺9寸5分の立像で、恵心僧都の作と伝えられ、現在秘仏になつていて拝観出来ませんが、実物大模造金仏は、寂照寺本堂にあり、**月僊木像**と共に安置されています。

15 桜木地蔵

桜木地蔵は桜木町東裏に、木の香も匂う瀟洒な堂宇に鎮まり、町民の信仰を集めて参詣者も多く訪れています。地蔵尊は3体よりなり、岩屋内に鎮座して祀られています。江戸時代には



大岡越前守忠相が、桜木地蔵にお詣りし、8代将軍徳川吉宗に見出されて江戸南町奉行に出世しました。又、三重ノ海や武藏丸も毎年、お詣りして横綱になったので、出世地蔵といわれています。毎年、6月23日にカラオケ大会があり、6月24日の祭礼には大変な賑わいがあります。

16 牛谷坂

牛谷坂はいよいよ長峯の終点であります。昔は牛馬がわずかに通れるほどの峻嶮な山坂でありました。延宝2年(1674)、時の内宮長官藤波氏富が寛文の尾部坂改修に刺戟されて開修に着手し、多数の犠牲者やごうごうたる非難を浴びつつ初志を貫徹、遂に翌年、さしもの難工事を完遂して、参宮路を開いたのであります。それまでの参宮路は中之地蔵町(現在は中之町)の三条前より東に折れて枕返し(中村町の墓あたり)を通り中村町を経て、宇治五十鈴川畔へ出て、内宮へ参っていました。



現在のような直路平板な坂道とした功労者は、古市の妓楼千束屋りとあります。りとは千束屋初代市右衛門の妻として、各所に独創性を發揮して、よく家業を盛大に導いた女丈夫で後世にまでその名を響かせた女傑であります。

りとは安濃八町(津市八町)の生まれで、魚仲買人八兵衛の娘として生まれましたが、幼くして両親に死別し相当な苦勞の末、成人したことは容易に想像できます。

金一千両を用意して、夫市右衛門の名を以て、文化2年(1805)牛谷坂直路開作の大工事に着手しました。

その功により苗字帯刀を許され、山田姓を名乗りました。りとは88歳まで生きて眠るように大往生したといわれています。



17 猿田彦神社

猿田彦大神が天孫降臨の際に、高千穂に瓊瓊杵尊^{ににぎのみこと}*^{あめのうずめみこと}をご案内し、妻の天宇受賣命と共に伊勢の地から全国へと開拓を進めた神様だから「みちひらき」の神様といわれています。大神の御裔の大田命が始祖です。崇敬者は全国に広く、方位除、地祭、土地開発、災除、家業繁栄、交通安全、病気平癒、開運などにご利益があるといわれています。※瓊瓊杵尊：天照大御神の孫





18 隠岡遺跡

・隠岡遺跡は古市丘陵北端の標高20 m前後の台地上に立地します。

遺物の散布範囲は、東西 170 m・南北 130 mほどで、本来は南側に

向けて大きく広がっていたと考えられています。遺跡は、岡田登氏の分布調査で確認され、周知の遺跡となりましたが、鈴木敏雄氏が昭和 22 年に作成した『元神宮皇学館大学所蔵品土器実測図』には、本遺跡から出土した弥生後期の高環脚部 2・環部 1・壺 2、土師器甕 1 点の図が記され、戦前すでに本遺跡から多くの遺物が出土していることが明らかになりました。

2 次にわたる調査で、弥生時代後期中葉（2世紀）から古墳時代初頭頃（3世紀中頃）の竪穴式住居 55 棟・主幹排水路 6 条、平安時代前・中期頃（10世紀初頭～11世紀後半）の堀立柱建物 8 棟・土杭 3 基、平安時代末期頃（12世紀中葉～後半）の堀立柱総柱式建物 3 棟・貯蔵壺（大麦約 1,100 粒）1 基、その他奈良時代中葉から後半の土杭、鎌倉時代前半頃の土杭、鎌倉時代後期の土杭墓 1 基、時期不明の井戸 1 基ほかが確認されています。

弥生時代の大規模な集落は、宮川東岸の伊勢市内では初めての確認で、倭姫命の内宮創祀の時期とも関わる遺跡として注目されています。



19 常明寺跡

倭町は昔「常明寺門前町」と呼ばれていました。尾上町の坂の上から常明寺に至る道は、妓楼・茶店・寿司屋・土産物屋が立ち並び、本街道に劣らぬにぎわいの道でした。特に文政(1818～1830)、天保(1830～1844)のころには古市を凌駕するほどありました。江戸の狂歌師蜀山人は、それにぎわいを「古市と聞てもくさき尾部の坂 ねりべいならば仁王門前」と読んでいます。明治元年の廃仏毀釈により廃寺となり、町からはにぎわいが消えてしまいました。



常明寺の開基は不明ですが、天平年間(729～749)の創基といわれています。この地方一円を支配した豪族で、外宮禰宜家であった度会一族の氏神として建立されました。元は真言宗でしたが、寛永年間(1624～1644)に改宗されて天台宗となりました。その後、明治維新まで比叡山に属し、高日山常明寺といい、本尊は薬師如来です。神都、近郷近在随一大寺で、大伽藍が立ち並び本堂・庫裏・山門宿坊7棟等があり、実に堂々たるものでした。

廃寺となった常明寺山は御幸道路の建設にともない、山を切り開き道路をつないだため、山は二分されました。

常明寺門前町から倭町と改めた町は境内の一部と金刀比羅神社等の社殿・御神体を町所有の神社とし、寺は取り壊されました。

20 倭姫御陵墓伝説地

この倭姫命石隠れ伝説は、神宮の經典といわれた神道五部書の一つ『倭姫命世記』に尾上山のどこかに、石隠れ給うた石窟があるに違いないということで、旧常明寺の山林にある石窟が最有力として、明治12年4月13日、「倭町共有林内の古墳、元常明寺山は自今、御陵墓伝説地として宮内省において保存せらる」という達令が出されました。



た。しかし、これはあくまでも伝説予定地です。**倭姫**とは、日本**の姫君**という意味で、日本武尊と同様に固有名詞ではありません。**斎王**は未婚の皇女又は女王を当てるのが古例であったので、日本を代表する姫という意味で、代々の**斎王**の呼称となったものと思われます。この**御陵伝説地**の古墳は前方後円墳で、横穴式石窟です。現在は、立て札に「宇治山田陵墓参考地 宮内庁」とあり、柵がめぐらされて、立ち入り禁止となっています。

② 金刀比羅神社・神落萱神社

坂の入り口右手には「**金刀比羅神社・神落萱神社 常明寺跡**」という石碑があり、「山田と宇治の境に位置した度会二門の氏寺もとは真言宗 寛永年中（1624～1644）に天台宗に改宗され明治初期に廃寺となる」と記されています。



◆ 金刀比羅神社

祭神は**大物主命**（大国主命の別名）、常明寺の守護神として、天平年間に創建されたといわれています。

以前は「**金毘羅大権現**」と称していましたが、明治元年3月12日神仏混合を禁じられ、「**金刀比羅神社**」と改められました。当時、常明寺境内を2分し、一方を神社地、他方を寺地としましたが、明治2年**常明寺**が廃寺となり、神社地だけが残されました。その後、明治42年3月神社統合令により、箕曲中松原神社より返却され、**神落萱神社**・稻荷社・三輪社・尾上社等を合祀し現在に至っています。

◆ 神落萱神社

祭神は**鶴萱草葺不合尊**とその妃、**草野姫命**（玉依姫命）です。初代神武天皇の父にあたります。妃は多産だったので、**子授けの神様**として崇められています。又、毎年、1月8日の大祭には男女のシンボルを模した餅を供え、子授けの祈祷をし、午後には餅まきをします。



◆ 子育て地蔵尊

倭町の古老の話によると、明治の初めごろ神落萱神社に子授けの祈祷の参詣にきた夫婦が帰る時、廃寺となった常明寺の瓦礫の中に埋もれている一体の地蔵様を見つけ、洗い清めて神落萱神社の裏手の樹の下に安置しました。

②2 日蓮上人誓いの井戸

この井戸は、元常明寺山のすぐ南方にあり、約 500 坪の用地をコンクリート塀で囲み、正面に信者による大法塔が建ち、その南東に井戸が石積と枠に守られています。又、入口には「日蓮聖人大誓願靈場、昭和 5 年 3 月正法護持財団」の大石柱の外、「我日本の柱とならん 我日本の眼目とならん 我日本の大船



日蓮三大誓願

とならん」といういわゆる日蓮三大誓願が、伊勢市観光協会の手で建てられています。これは日蓮が立教前の若いころ、この常明寺に参籠し、この閼伽井で水垢璃をとり、神宮に日参すること百ヶ日ついに三大誓願を得て立教の光明を見出したという故事に基づいています。

※閼伽井：仏に供える水を汲んだ井戸



閼伽井の井戸

③ 神宮徵古館・農業館

神宮徵古館は伊勢神宮の「歴史と文化の総合博物館」です。神宮のおまつりや歴史・文化に関する資料を中心に収蔵・展示し、伊勢神宮を知るために必見の博物館です。



神宮徵古館

神宮農業館は、人間と自然の産物との関わりをテーマとした日本最初の産業博物館です。

両館は「**神苑会**」の企画により、日本最初の私立博物館として創設されました。

明治 19 年(1886) に発足した「**神苑会**」は、当時神宮の神域に民家が接近し、火災等の恐れも多かった神苑の清浄と美観を守ると共に、博物館等の文化施設の開設を目的としました。

明治 22 年(1889) には有栖川宮熾仁親王を初代総裁にいただき、明治天皇の御手許金御下賜を始め、全国有志の協賛を得て、国家的な規模で事業を進めました。まず、農業館が明治 24 年(1891) 外宮前に建てられ、明治 38 年(1905) に倉田山へ移転増築しました。明治 42 年(1909) 9 月 29 日には徴古館が建設され、明治 44 年 3 月 31 日に徴古館と農業館が「**神宮徴古館農業館**」となり、「**神苑会**」は事業目的を完遂して解散しました。昭和 20 年の戦災で徴古館の建物と収蔵品の大部分を焼失しましたが、昭和 28 年の第 59 回式年遷宮を記念して、外壁はそのままに 2 階建てに再建され、平成 27 年には更に改修されて平成 27 年 10 月 31 日から新しい徴古館が開館しました。

徴古館と農業館の建物は、赤坂離宮を手掛けた当時の宮廷建築の第一人者・片山東熊の設計です。



神宮農業館

24 倭姫宮（内宮別宮）

倭姫宮は、外宮と内宮の中間、倉田山丘陵にあり、内宮の別宮の中でも特別のお宮です。

倭姫命は、第 11 代垂仁天皇の皇女です。第 10 代崇神天皇の皇女





とよすきいりひめのみこと
豊鍬入姫命の後を継いで「御杖代」^{みつえしろ}*として
すめおおみかみ
皇大御神に奉仕され、^{すめおおみかみ}**皇大御神**を戴いて大
和国をお発ちになり、諸国を経て伊勢の国に
入られて、ご神慮によって現在の地に万代不
易の**皇大御神**をご創設されました。

倭姫命から後、代々の天皇は未婚の皇女
を伊勢に遣わして**皇大御神**に奉仕させられましたが、このお方を**斎王**^{いつきのみこ}と申し
上げます。

倭姫宮は皇大神宮別宮として大正 12 年 11 月 5 日に鎮座祭が執り行われま
した。

* **御杖代**: 皇大御神の御杖となり、ご神慮を体して仕えられるお方の意味です。

25 神宮文庫

神宮文庫は、伊勢神宮が運営する
図書館です。江戸時代に入り、慶安元
年(1648)に外宮の**豊宮崎文庫**^{とよみやざきぶんこ}が創設
されました。又、貞享 3 年(1686)には、**内宮文庫**が立てられ、元禄 3 年に
は**林崎文庫**^{はやしざきぶんこ}と改称されました。やがて、明治 4 年(1871)の神宮改正にともない、
両文庫をはじめ**文殿・神庫**^{ふどの しんこ}等の蔵書を合わせて設立されたのが**神宮文庫**です。

奈良時代の天平神護 2 年(766)、文書類を保管するために内宮に**文殿**^{ふどの}が
つくられ、外宮では、鎌倉時代の弘長元年(1261)に**神庫**^{しんこ}がつくられました。

外宮と内宮の対立もあり、これらの施設は明治維新後に廃止されるまで統
一されず、両宮それぞれで独立して管理・運営されました。

黒門

神宮文庫の黒門は江戸時代に活躍した御師福島御塩焼大夫の屋敷の門(安
永 9 年<1780>建設)を昭和 10 年に移築したもので



黒門

26 太田小三郎君紀功碑

太田小三郎は、古市三大妓楼の一つである備前屋の最後の主人で、崇敬家としても知られた人です。

小三郎が生涯を通じて成し遂げた神都における文化事業のいずれもが現代のさきがけであり、その足跡は誠に大きく、伊勢市民にとって、忘れることのできない大恩人です。修道地区にとっても彼は忘れる事のできない人です。



明治初期の神宮は宮域の中に民家が入り込んでいて、神宮の尊厳と神聖が保たれていませんでした。そこで彼は「神宮の尊厳を維持し、我が国の象徴である神宮とその町を国民崇拜の境域にすべき」と呼びかけて同志を募り、明治19年(1886)に財団法人「神苑会」が結成されました。小三郎が神宮の整備に尽くした業績は、想像以上なものがあり、明治天皇下賜金^{かしきん}、一般の寄付金等を合わせて711万円^{*}余りの財源を元にして、神宮周辺の民家183戸を撤去したり、2万余歩を買収して神苑の拡充を図り、更には倉田山に3万余歩の土地を買収して徵古館・農業館を建設し、神宮文庫をつくるなど活発な事業を行いました。小三郎は単なる敬神家というのではなく、偉大な事業の実践家でした。しかもその事業は広い視野に立って行われ、近代的な伊勢市開発の名譽ある開拓者でした。

彼の功績を讃える記念碑は、県道鳥羽松坂線(御幸道路)を内宮に向かって大鳥居を20m過ぎたあたりの左側に『太田小三郎君紀功碑』(昭和9年11月5日)と刻まれた大きな石碑が建設されています。又、神苑会の大記念碑の裏に太田小三郎の名前があります。

* 711万円は現在の1,400億円～1,500億円相当です。 *1歩：1.822m²

りゅうちざんまつおかんのんじ
27 龍池山松尾觀音寺

寺伝によると龍池山松尾觀音寺は、約1,300年前の奈良時代(712年)に当時の高僧、行基が伊勢神宮参拝の折にこの松尾山に当寺を創建されたと伝えられています。

松尾觀音寺は、本山も末寺も檀家も持たず、いずれの既成宗派にも属さないという特異な形態で存在している祈願寺で、靈験あらたかな**本尊 11面觀世音菩薩**と脇に仕える**地藏菩薩**、**毘沙門天**が衆人の除災、結縁などに大変ご利益があるとされ、参拝者が多く訪れています。又、当山は伊勢国国司北畠氏が、代々守護寺とし、後には北畠統一の木造氏の氏寺として崇拜されてきました。

当寺は二ツ池の龍神伝説があります。山号の龍池山は本堂裏にある二ツ池(龍池)から名付けられたとされています。昔から東の池には雄龍、西の池には雌龍が、それぞれに住み、觀音様をお護りになっているといわれており、今から約610年前の応永10年(1403)5月に本堂が火災に遭った際に、池か

ら尊くもその2体の龍神様が現れ、雄龍は燃え盛る炎を飲み込みながら空から舞い降り、觀音様を自らの体で幾重にも巻き付け、又、雌龍は何度も池の水を炎に吹きかけ觀音様を火災からお護りになったという伝説が残っています。



主な出典：「伊勢古市考」「伊勢の古市あれこれ」「伊勢の古市夜話」野村可通著 伊勢市史 第7巻文化財編 龍池山松尾觀音寺しおり
インターネット検索



2015年11月21日撮影





発行：修道まちづくり会
<http://www.shudo.biz/>

昭和5年 吉田初三郎画

所蔵 (C)アソシエ地図の資料館 吉田初三郎コレクション